

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第5号 令和5年(2023年)8月31日発行

時折吹く風に秋の気配を感じるこの頃、御機嫌いかがでしょうか。プロ研通信第5号では、8月3日(木)に開催した校内研究主任パワーアップ研修[小学校・中学校][第2回]と合同で開催した第4回校内研究活性化プロジェクト研究会での研究委員のみなさんの学びを振り返ります。

夏季休業中も研究委員のみなさんは、2学期以降の校内研究活性化に向けて、1学期の取組の分析や今後の準備を進められ、その主体的に学ぶ姿は、今まさに求められている「新たな教師の学びの姿」だと感じます。この姿が各実践校の先生方に伝わり、それぞれの学びが日々の授業改善につながることで、子どもたちの学びが変わっていきます。今年度の終わりに、「校内研究に真剣に取り組んでよかった」「自分が学ぶことで子どもたちの学ぶ姿も変わった」と先生方が感じられる校内研究になるよう、共に学びを進めましょう!

第4回プロジェクト研究会

(校内研究主任パワーアップ研修[小学校・中学校][第2回])

概要

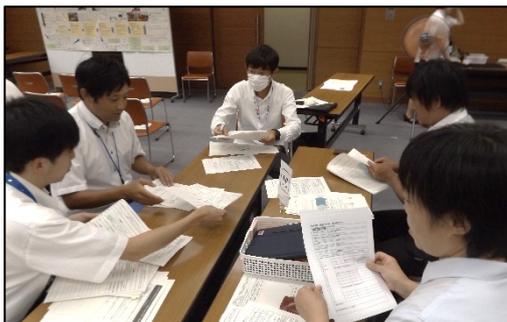
研究会のめあて

校内研究主任としての職務および校内研究を組織的に推進するための明確なビジョンと手法を学ぶ。

他校の取組に学ぶ

13:45～ 1学期の校内研究の実践交流 — 「校内研究プランシート」を基に—

研修会のはじめに、当センター主幹加藤から、目的をもって研修に臨むことで、研修での学びをより深めて欲しいという話がありました。そのうえで、小学校と中学校の校内研究主任70名が、16グループに分かれて1学期の校内研究の実践交流を行いました。研修に参加された校内研究主任のみなさんは、校内研究主任パワーアップ研修[小学校・中学校][第1回]を経て、各校で作成された「校内研究プランシート」を基に、自校の1学期の実践を振り返りながら交流されていました。この実践交流の中に、校内研究主任のみなさんの「個別最適な学び」と「協働的な学び」が見て取れます。他校の具体的な実践について学びながら、目指す校内研究の姿に向けて、今後の校内研究での取組のヒントを探しておられる様子は、協働的な学びの中において個別最適に学ばれている、ということができそうです。校内研究主任のみなさんが自校の校内研究に対して明確な課題意識をもって交流したからこそ「個別最適な学び」も「協働的な学び」も充実し、学びが深まったと感じました。



実践交流の様子①



実践交流の様子②

昨年の実践事例に学ぶ

14:15～ 令和4年度研究 事例発表

令和4年度
総合教育センター研究員研究
校内研究活性化プロジェクト研究

研究主題

小中学校における
児童生徒一人ひとりの
「確かな学力」の向上に
つながる校内研究
— 自校の課題解決に向けた
組織的・継続的な
「共通理解・共通実践」を
通して—

各校に配付した通信では、昨年度の実践校の
校内研究主任が事例を紹介している様子を写
した写真を載せました。

令和4年度総合教育センター研究員研究で、共に研究を進められた7校の実践校の研究委員のみなさんに事例発表をしていただきました。校内研究の推進に向けた取組とその成果・課題について、5分間の事例発表を7回実施され、研修参加者は全ての実践校の事例発表を聞くことができました。

研修に参加された他校の校内研究主任の感想（一部抜粋）

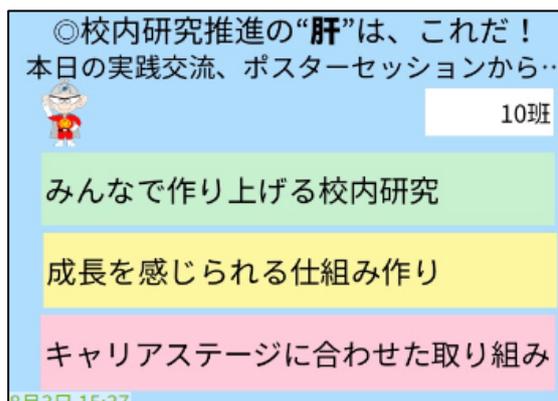
- ・多くの教員に参加してもらって研究にしたいと思いました。そのために、各教員が校内研究を自分事として捉え、成長を実感できる仕組みを考え、改善していく必要を感じました。教員それぞれの得意を生かし、研究主任はその調整を行う意識をもちたいと考えました。
- ・7校の発表を聞いて、校内研主任として、仲間を増やすためにつなぎ役になること、学び合いで先生方が成長を自覚できる仕掛けづくりを肝として研究を推進していくことを決めました。今までの方向性が間違っていないこと、自校のよさや強み、継続することで見えたことへの期待を確認することができました。
- ・7校の先生方の事例発表を聞いて、9月から授業研究会の効果的なもち方についてのポイントを学ぶことができました。授業研究会がその学年単体の成果と課題を見つけることにとどまらず、「今日の学びを生かして、自分の学年では何ができるか」を交流して次の校内研究、自学年の明日からの取組に生かすことが、系統立てた取組につながっていくことが分かりました。
- ・様々な事例を学ばせていただき、正直「もっと聞きたい！」となりました。どの先生にも共通して、校内研究は一人でせず、全員で共通理解・実践が大切であると仰っていました。改めて自分が一人でしているのではないということ意識し、共に学び合う集団のつなぎ役になりたいです。

自分事として取り組めるように仕掛けること、校内研究主任がつなぎ役となって全員で取り組める体制づくりを行うことなど、それぞれに学びがあり、「個別最適な学び」の時間となりました。

15:10～ 2学期の校内研究の効果的な推進に向けて

グループに戻って7校の事例発表での学びを交流し、2学期の校内研究の推進に向けて“肝”を協議しました。右の図は発表していただいた10班の先生方がまとめられた“肝”です。参加者のみなさんは、それぞれのグループから出てきた考えを取り入れながら、2学期に向けて校内研究を活性化させる次の一手を思案されていました。

各グループでまとめられた考えは、学習支援アプリロイノートスクールを用いて共有され、会場全体での「協働的な学び」が行われました。このように、校内研究や授業でも、ICTを活用すると交流がスムーズになる場面があるので、参考にしてみてください。



10班がまとめた校内研究推進の“肝”

先生方が協議されている姿を見ていて、グループを構成する一人ひとりの個別のニーズ（本研修においては、各校内研究主任の自校での研究に対する課題意識）が明確であれば、協議が活発になることを改めて実感しました。ニーズが明確であれば協議に対して目的意識をもって参加し、議題を焦点化して捉えたり、多面的に捉えたりして、協議をより深めることができるからです。

研究委員のみなさんが、自校の先生方に校内研究を自分事として捉えてもらおうと取り組んでおられることは、ニーズの明確化や「個別最適な学び」の充実に直結します。今取り組んでおられることに自信をもって、この調子で校内研究をどんどん活性化させていきましょう！



15:45～ 【講義】「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて校内研究が果たす役割

滋賀大学教職大学院 准教授 北村 拓也 氏

「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて

「新たな教師の学びの姿」とは？

図1

『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について
～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する
質の高い教職員集団の形成～(答申)
(令和4年12月19日 中央教育審議会)

子供たちの学び(授業観・学習観)とともに教師自身の学び(研修観)を
転換し、「新たな教師の学びの姿」(個別最適な学び、協働的な学びの
充実を通じた、「主体的・対話的で深い学び」)を実現。

- 変化を前向きに受け止め、探究心をもちつつ自律的に学ぶという「主体的な姿勢」
- 求められる知識技能が変わっていくことを意識した「継続的な学び」
- 新たな領域の専門性を身に付けるなど強みを伸ばすための、一人一人の教師の個性に即した「個別最適な学び」
- 他者との対話や振り返りの機会を確保した「協働的な学び」

北村先生から投げかけられた「なぜ、『新たな教師の学びの姿』の実現が求められるのでしょうか?」という問いに、研究委員のみなさんはどのような答えをおもちですか?現場の実感として「新たな教師の学びの姿」が必要だと感じられ、自分事として捉えられていると素敵だなと思いました。

求められる「子どもの学び」の実現に向けて

図2

一人ひとりの子供を主語にする学校教育

児童生徒が学び、学び合う学校

教職員が学び、学び合う学校

- ・子どもの主体的な学びを支援する伴走者としての能力（コミュニケーション・ファシリテーション）を養う
- ・多様な教職員が個々の指導力を磨くとともに、組織、チームとしての教育力・課題解決力を高める

一人ひとりの教師を主語にする学校

新たな教師の学びの姿の実現

求められる「子どもの学び」（学習観・授業観）を実現するために、一人ひとりの子どもを主語にした、「児童生徒が学び、学び合う学校づくり」が求められています。その実現のために、子どもの「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指します。そして、そのために教職員が学び、学び合う学校づくりが求められるということです。求められる「子どもの学び」に合わせて、教師に求められる学びも変化する必要があります。教師の学びでも「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、自

身の学び(研修観)の転換を推進することで、「新たな教師の学びの姿」を実現していくことが重要だと感じました。

「新たな教師の学びの姿」の実現に向けた校内研究の役割

教師の「主体的な姿勢」を引き出すために 図3

- 必然性を感じる校内研究のテーマを設定する
- 校内研究に対する自分自身の目標や課題をもつ
- 校内研究で目指す子どもの姿、授業のイメージを理解し、どうすれば実現できるのか、何が 필요한のかを考える
- 校内研究に取り組むことが、子どもたちにとって、学校にとって、自分自身にとって、どのように役立つのかを理解できるようにする

教師の「主体的に学ぶ姿勢」を引き出し、学ぶことの楽しさ・価値を再確認できるようにする！

教師の「継続的な学び」を生み出すために 図4

- 校内研究の目標の実現や、自分自身の課題の解決に向け、研究計画を立てる（研究の進め方をデザインする）
- 指導案検討、授業参観、研究協議、指導助言を通して、必要な資質・能力を身に付ける（個人のニーズにも対応した校内研究）
- 授業研究会や実践報告会など、研究の成果と課題を振り返ったり、他者からの評価・助言を受ける機会を設けたりする（自己評価・他者評価）

校内研究をロールモデルに、研究の進め方を身に付けることができるようにする！

教師の「個別最適な学び」を実現するために 図5

- 研究の進め方の個別化
同じ目的に向かって、それぞれの教師のキャリア、個性に合った進め方ができるようにする
- 研究のテーマ、進め方の個性化
それぞれの教師の目的やニーズに合った研究に取り組めるようにする

自分自身の研究をコーディネートできるようにする！

教師の「協働的な学び」を実現するために 図6

- 教師の「個別最適な学び」が「孤立したもの」にならないようにする！
- 教師一人ひとりのよい点や可能性を生かし、異なる考え方を組み合わせ、よりよい学びを生み出すことができるようにする！
- 教師として、よりよい学校や社会の創り手となるために必要な資質・能力を身に付けることができるようにする

研究のプロデューサー&ファシリテーターである校内研究主任の力が求められています！

(図1～6は北村先生のスライド資料を基に研究員が作成したものです。)

研究委員のみなさんの振り返り

- ・どの学校の研究発表にもあった、全体を巻き込んだ研究にしたいと思います。教職5～10年目くらいの先生を小グループのリーダーとして、学年やキャリアを超えたメンバーで授業づくりに取り組んでいこうと思います。
- ・校内研究をする上で、仕掛けが大切であることをどの学校も発表されていました。また、自分事として捉えられるようなシステムをつくることも大切で、嫌々でやるような研究・研修ではなく、意味のあるものにしなければならないと強く感じました。
- ・子どもたちが楽しく学びを深めていくために、校内研究を活性化していくことはとても大切なことだと改めて感じました。先生方が校内研究を自分事として捉えられる仕掛けを見つけることができました。
- ・自分事として捉えてもらうためのアプローチの工夫が参考になりました。もっと先生方を巻き込んで進めていけるようなアイデアを考えて、2学期以降進めていきたいです。管理職の先生との連携をもっとしていけるといいなと感じました。
- ・どの学校の実践を聞いても出てきたことは、校内研究主任だけで進めるのではなく全ての教職員を巻き込んでいくようなシステムを作ることの大切さでした。そのような研究を進めるために、研究主任はみんなを“つなぐ”役割を担っているのだと自覚しました。先生方のよさをどんどん生かした研究にしたいです。

みなさんの感想からは、“自分事として”“全体で”“主体的に”“管理職と連携して”といったキーワードが見て取れます。校内研究を活性化させるために重要なことだとみなさんが感じておられることなので、2学期の実践の中で意識して取り組んでいけるとよいですね。

第4回プロジェクト研究会を終えて、研究員の思いと今後に向けて

今回の校内研究主任パワーアップ研修[小学校・中学校][第2回](第4回プロジェクト研究会)では、昨年度のプロジェクト研究実践校の事例発表を含め、規模や校種が異なる様々な学校の校内研究の実践から学んでいただきました。きっと大きな刺激を受けていただけたのではないのでしょうか。校内研究を活性化させるための次の一手に向けて、参考になる実践に出会われた研究委員もおられました。研究委員のみなさんの各校の校内研究に対する課題意識がはっきりとしているからこそ、学びの多い時間になったのですね。

さらに、北村拓也先生の講義内容を踏まえて、校内研究で取り組んでいることを価値付けていただければ、各実践校の先生方にも毎回の校内研究の目的が、より明確に伝わります。そうすることで、2学期以降の校内研究が活性化していくことに違いありません。

「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて、校内研究が重要な役割を果たします。その校内研究を主として企画・運営する校内研究主任のみなさんの役割も当然重要になります。プロジェクト研究のメンバー全員で力を合わせて、よりよい校内研究活性化のための手立てを探っていきましょう！



研究員 いぬます けいご 稲益 圭吾



研究員 しまうち ゆうしょう 島内 佑祥